

1.

ジェンダー研究所  
2023(令和5)年度  
事業概要

ジェンダー研究所概要

2023 年度事業概要

## ▶ジェンダー研究所概要

### 学際的・先駆的なジェンダー研究と教育を推進する国際的な学術拠点

お茶の水女子大学ジェンダー研究所は、学際的かつ先駆的なジェンダー研究と若手研究者育成を推進する国際的な学術拠点である。その起源は、1975年にお茶の水女子大学に創設された「女性文化資料館」という研究機関である。ジェンダーやフェミニズムという言葉が一般的には全く知られていなかった時代から、歴代の所属研究者たちはジェンダー研究に取り組み、学内外・国内外の研究者らと積極的に研究交流を続けてきた。これら先人の研究者たちが培ってきたジェンダー研究の成果と国際的な学術ネットワークを礎に、現在、ジェンダー研究所では、高水準の国際的研究プロジェクトの実施、国際シンポジウム等の開催、若手研究者の育成、学術雑誌『ジェンダー研究』の編集・刊行、研究教育成果のグローバルな発信と社会還元を推進している。

[参照:本報告書 103 頁 資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」]

### ジェンダー研究所（Institute for Gender Studies (IGS)）の沿革と本学ジェンダー研究教育の動き

1875	東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）開校
1949	お茶の水女子大学設立
<b>1975</b>	<b>女性文化資料館設立</b>
<b>1986</b>	<b>女性文化研究センター設立</b>
1993	大学院人間文化研究科博士後期課程人間発達学専攻「女性学講座」を創設
<b>1996</b>	<b>ジェンダー研究センター（IGS）設立（国内大学初の「ジェンダー研究」を目的とする研究施設）</b>
1997	大学院人間文化研究科博士前期課程発達社会科学専攻「開発・ジェンダー論コース」設置
1998	大学院人間文化研究科博士後期課程「女性学講座」を人間発達科学専攻「ジェンダー論講座」に改組
<b>2003</b>	<b>21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア（F-GENS）」採択</b>
2004	国立大学法人 お茶の水女子大学設立
2005	大学院人間文化研究科博士後期課程「ジェンダー学際研究専攻」設置
2006	大学院人間文化研究科博士前期課程「ジェンダー社会科学専攻」設置
2007	大学院人間文化研究科を人間文化創成科学研究科に改組
<b>2015</b>	<b>グローバル女性リーダー育成研究機構 ジェンダー研究所設立</b>

## ▶ジェンダー研究所 2023 年度事業概要

### 1. 研究プロジェクト

2023 年度は IGS 研究プロジェクトとして所属研究者それぞれが進めている共同研究・個人研究が 7 件、研究代表者または分担者として科研費を獲得しての研究プロジェクトが 7 件、そして海外の助成金によるプロジェクト 2 件の、計 16 件のプロジェクトが進められた。IGS 所属研究者らは、研究会やセミナー、国際シンポジウムを企画開催したほか、学会発表や論文投稿、書籍刊行、学術誌『ジェンダー研究』の編集刊行により成果発信にも努めた。[参照:本報告書 13 頁「研究プロジェクト」、59 頁「学術成果の発信」]

#### 1)IGS 研究プロジェクト

	プロジェクト名	担当
1	「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究	申
2	東アジアの越境的女性運動	大橋
3	資本と身体ジェンダー分析	大橋・足立・板井
4	性・身体・再生産領域におけるジェンダー分析	嶽本
5	反公害/環境運動史におけるジェンダー分析	嶽本
6	グローバル・ガバナンスの変容と国家の再構築におけるジェンダー	本山
7	文学・芸術文化表象とジェンダー	戸谷

#### 2)外部資金による研究プロジェクト

	財源	テーマなど	担当
1	科研費基盤 B	課題番号:23H03654 フェミニズム理論による新たな国家論の構築:ケア概念と安全保障概念の再構想から[研究代表者:岡野八代(同志社大学)] (2023~2026 年度)	申 本山
2	科研費基盤 B	課題番号:23H00888 日本における移住女性家事・ケア労働者の労働状況と主体性に関する発展的研究[研究代表者:定松文(恵泉女学園大学)] (2023~2025 年度)	大橋 平野
3	科研費基盤 B	課題番号:20H01468 新興アジアにおける IT-BPO の国際分業の成立とジェンダー [研究代表者:堀芳枝(早稲田大学)] (2020~2023 年度)	大橋 足立
4	科研費(国際共同研究強化 B)	課題番号:21KK0033 人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー [研究代表者:堀口正(大阪公立大学)] (2021~2024 年度)	大橋
5	科研費基盤 C	課題番号:19K12603 香港における移住女性の再生産労働力配置:「グローバル・シティ」のジェンダー分析 (2019~2023 年度)	大橋
6	科研費基盤 C	課題番号:23K11676 「からゆきさん」にみる性・移動・再生産領域 (2023~2025 年度)	嶽本
7	科研費若手研究	課題番号:23K17134 日本による親ジェンダー外交の展開:安全保障、ガバナンス、植民地主義視点からの分析 (2023~2027 年度)	本山

#### 3)海外の助成金によるプロジェクト

- ①ノルウェーリサーチカウンスル INTPART(戸谷・小玉・仙波・佐野)2019(H31)~2023(R5)
- ②ノルウェー高等教育国際連携推進機関 Diku の UTFORSK(戸谷)2021 年 8 月~2025 年 7 月

2. 国際シンポジウム等の開催

IGS 主催のシンポジウムやセミナーは、ジェンダー研究所所属研究者が、自身の研究成果と国際的な人脈を生かして企画しており、研究所の研究・教育事業と有機的に連携している。

2023 年度は「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」をテーマに国際シンポジウムを開催した。国際関係論、文化人類学、難民研究という異なる領域のニュージーランドと日本の研究者が登壇して、複数の権力関係が交差する階層的なグローバル政治において、セクシュアリティと暴力をめぐる言説がどのようにネイションや人種の境界を管理し、家父長制や異性愛主義を強化しているのか討議した。シンポジウムの内容は、『ジェンダー研究』第 27 号（2024 年 7 月刊行予定）特集企画として掲載される予定である。

● 2023 年度 IGS 主催・共催・後援イベント

IGS 主催		
<p><b>国際シンポジウム</b></p> <p>グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力 [本報告書 25 頁]</p>	<p><b>IGS セミナー(学内限定)</b></p> <p>トランス排除を乗り越えるみんなのフェミニズム：連帯という実践へ [本報告書 28 頁]</p>	<p><b>IGS セミナー(学内限定)</b></p> <p>「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化の課題～Lennon &amp; Alspop “Gender Theory in Troubled Times”を読む～ [本報告書 31 頁]</p>
<p><b>IGS セミナー</b></p> <p>「戦後」沖縄フェミニズムにおける「ホーム」概念の変容とその可能性 [本報告書 32 頁]</p>	<p><b>IGS セミナー</b></p> <p>「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育：本質主義の克服に向けて [本報告書 34 頁]</p>	<p><b>IGS セミナー(学内限定)</b></p> <p>リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）の日本における政策課題と女性運動：墮胎罪・優生保護法を中心に [本報告書 36 頁]</p>

このほか、2023 年度には IGS セミナー6 件、研究会 1 件を主催し、共催シンポジウム・研究会を 4 件開催した。うち 2024 年 1 月に開催した IGS セミナー（学内限定）「リプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）の日本における政策課題と女性運動：墮胎罪・優生保護法を中心に」は、『ジェンダー研究』26 号の特集テーマをさらに深く掘り下げて議論するために大学院生たちが主体となって企画したものである。また、同じく院生が中心となって7月に開催された IGS セミナー（学内限定）「トランス排除を乗り越えるみんなのフェミニズム——連帯という実践へ——」や、1月にイギリスの研究者を招いて開催された国際セミナー「「トラブルの時代」におけるジェンダーの理論化と教育～本質主義の克服に向けて」など、インターセクショナルな視点にもとづくフェミニスト研究・実践を広く社会と共有しながら進めていくために、今年度も多くの重要なイベントを企画開催した。[参照:本報告書 23 頁「国際シンポジウム・セミナー」]

● 2023 年度 IGS 主催・共催・後援イベント

IGS 主催		IGS 共催
<p><b>IGS セミナー</b></p>  <p>今日の日におけるトランスジェンダー研究 [本報告書 38 頁]</p>	<p><b>IGS 研究会</b></p>  <p>IGS 研究協力員研究報告会 [本報告書 40 頁]</p>	<p><b>出版記念シンポジウム</b></p>  <p>『キャリアに活かす雇用関係論』を読んで・使う: ジェンダー視点を貫く授業 [本報告書 42 頁]</p>
IGS 共催	グローバル女性リーダー育成研究機構主催	IGS 後援
<p><b>IGS 共催研究会</b></p>  <p>国際ジェンダー学会 国際移動とジェンダー (IMAGE) 分科会 仏・旧植民地出身移民女性を中心化する予示的政治的空間: 政治的連帯の隠された戦術 [本報告書 43 頁]</p>	<p><b>女性学長国際シンポジウム</b></p>  <p>アカデミアにおける女性のリーダーシップと DEI: 女性学長が目指す 21 世紀に輝く大学教育 [本報告書 44 頁]</p>	<p><b>日本フェミニスト経済学 2023 年度大会</b></p>  <p>フェミニスト経済学とローカリティ: 移動の自由と生き方の幅 [本報告書 45 頁]</p>

### 3. 国際研究ネットワーク

2023年3月31日から、フランス・ローズ・ハートライン氏が日本学術振興会外国人特別研究員として来日し、IGS 研究協力員として日本におけるジェンダー多様性の実態、とりわけトランスジェンダーの経験についての研究課題に取り組んだ。その成果は2024年2月20日にIGS セミナー「今日の日本におけるトランスジェンダー研究」において報告した。この報告は対面で実施され、学内外から多くの研究者や市民が参加した。なおハートライン氏は、ノルウェー科学技術大学博士後期課程在籍中の2019年にノルウェーリサーチカウンシル INTPART のプロジェクトにおいてIGSでの研究留学を経験しており、IGSの国際研究ネットワークのなかで意欲的に研究活動を結実させてきたといえる。

また2023年8月21日から、ハワイ大学マノア校教授のペトリス・フラワーズ教授がIGS 研究協力員として在籍した。フラワーズ教授は日本の国際外交とジェンダーについての研究課題に取り組み、2024年3月5日に実施されたIGS 研究協力員研究報告会において「Doing Diplomacy: Gender, Hierarchy, and Food in US-Japan Relations」と題して報告を行った。なおフラワーズ教授もまた2007年度にIGS 客員研究員として滞在している。国際的に活躍するジェンダー研究者が日本で学術研究や交流に取り組む際の、重要なネットワーク拠点としてのIGSの存在意義を感じさせるといえよう。

2023年12月8日には、IGS 国際シンポジウム「グローバル政治の中のセクシュアリティと暴力」が開催され、ニュージーランド・ヴィクトリア大学のキャロル・ハリントン上級講師と、日本の神戸大学の工藤晴子准教授、成蹊大学の嶺崎寛子准教授が登壇して報告を行い、神戸大学の青山薫教授とともに活発な討議を行った。

このほか2021年度から大阪公立大学堀口正教授による国際共同研究プロジェクト「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」に大橋史恵 IGS 教員が参加し、中国社会科学院や華東師範大学の研究協力者とともに共同研究に取り組んでいる。

[参照: 本報告書 23 頁「国際シンポジウム・セミナー」、47 頁「国際研究ネットワーク」]

### 4. 若手研究者の育成

#### 4. AIT ワークショップ、博士前期課程ジェンダー-社会科学専攻・博士後期課程ジェンダー-学際研究専攻の指導

IGS 所属の特任講師が担当する大学院科目「国際社会ジェンダー論」はIGSの国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」の一環であるが、これはタイにあるアジア工科大学院大学 (Asia Institute of Technology) との短期交換研修プログラムである。AIT から博士前期課程の院生が来日し、お茶大院生と研究交流を行い、お茶大からも博士前期課程の院生たちがタイに派遣され、フィールドワークや、研究交流、帰国してからのAIT ワークショップ・プログラムの報告会、報告書作成などが組み込まれている。

また所属教員指導のもと、博士前期課程の6人がジェンダー-社会科学専攻を修了し、ジェンダー-学際研究専攻の博士後期課程の1人が学位を取得した。

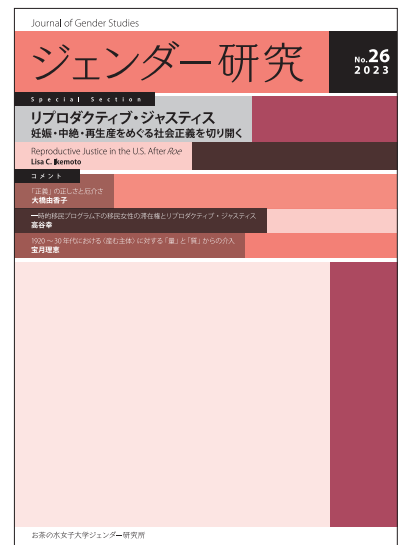
[参照: 本報告書 53 頁「若手研究者の育成」]



AIT ワークショップ・プログラムで来日したタイのアジア工科大学院大学の院生による研修報告会(2023年7月25日)。お茶の水女子大学大学院ゼミの一環として開催された。

## 5. 学術雑誌『ジェンダー研究』刊行と学術成果発信

国際的学術雑誌『ジェンダー研究』第26号（2023年7月刊行）は「リプロダクティブ・ジャスティス：妊娠・中絶・再生産をめぐる社会正義を切り開く」を特集した。本特集は、2022年12月に開催したIGS国際シンポジウムでの議論をもとにしている。特集論文として、Lisa C. Ikemoto氏の論考「Reproductive Justice in the U.S. After Roe」を掲載した。そのほか、同シンポジウムでコメンテーターとして登壇した大橋由香子氏、高谷幸氏、宝月理恵氏による、日本におけるリプロダクティブ・ライツ／ジャスティス運動、移住女性に対する滞在管理とリプロダクティブ・ジャスティス、そして歴史的に見た「産む主体」への権力介入について、コメントを合わせて掲載している。投稿論文については厳正な審査を通過した4本を掲載した。また書評セクションでは、近年に刊行されたジェンダー・フェミニズム関連書籍の中から17冊を取り上げた。



また『ジェンダー研究』第26号特集論文の日本語翻訳「ロー判決以後のアメリカ合衆国におけるリプロダクティブ・ジャスティス（性・生殖・再生産をめぐる社会正義）」を、IGS報告書シリーズ（IGS Project Series）No.27としてウェブ公開した。[参照:本報告書59頁「学術成果の発信」]

## 6. 文献収集・史料電子化、ウェブ発信、社会貢献

ジェンダー研究所では、寄贈図書・資料の受け入れ、所属研究者らの著書や研究関連図書、主催シンポジウム・セミナーおよび『ジェンダー研究』関連の書籍の購入を進めている。2023年度も、例年と同様に文献・資料の収集を進め、研究環境の構築に取り組んだ。

またウェブサイトによる情報発信も、ジェンダー研究所が力を入れている分野である。各イベントの事前案内だけでなく、イベント開催後は開催報告の日本語および英語による発信にも取り組んでいる。また2023年度は、前年度に引き続き、ウェブサイト掲載情報の精査を行った。ジェンダー研究に関わる最先端の情報を、より分かりやすく、国際的に発信するための検討と整理を進めている。

社会貢献の面では、上記のウェブサイトによる発信のほか、国際シンポジウム・セミナーを一般公開し、同時通訳をつけるなどして成果の還元に努めた。また各所属研究者は、報道機関による取材に応じることなどを通して、広く世間にジェンダーに関わる知見を広めた。[参照:本報告書65頁「文献収集公開・史料電子化・web発信」、71頁「社会貢献」]

## 7. 構成メンバー

教員を含め研究所の中核となるメンバーは前年度から変化なく、引き続き研究所の事業に取り組んだ。スタッフにおいてはアカデミック・アシスタントとして花岡奈央氏が新たに着任し、ウェブ関係の業務を担ったほか、研究協力員として、4月からは佐々木真理（実践女子大学）教授、フランス・ローズ・ハートライン氏（日本学術振興会外国人特別研究員）、8月からはペトリス・フラワーズ（ハワイ大学マノア校）教授が加わり、セミナー・報告会等で研究所に貢献した。[参照:本報告書103頁資料⑦「国立大学法人お茶の水女子大学ジェンダー研究所規則」、76頁資料①「構成メンバー」]